
日本職業・災害医学会会誌 第51巻 第1号
Japanese Journal of Occupational Medicine and Traumatology
Vol. 51 No. 1 January 2003

巻頭言

第50回日本職業・災害医学会（学術大会）に出席して

岩 瀨 眞

燕労災病院院長

平成14年10月25日（金）、26日（土）の2日間、北九州市小倉北区の北九州国際会議場で開催された第50回日本職業・災害学会（学術大会）に出席した。小生にとっては本学会への出席は2回目、今回は産業医科大学麻酔学講座の重松教授が会長を務められたこともあり産業医大の見事なまでのチームワークと全面的な支援体制が大会期間中を通じて見られ実に、気持ちの籠もった実り多い学会であった。

本学会のテーマ「全人的アプローチ」は巻頭言の中で会長が述べておられるように、社会の構造改革が進み医療分野においても従来の細分化から統合、多様化が求められているなかで、本学会が横の広がりと多様性を持った時代のニーズに合致した学会であることを会員に再認識していただきたいと考え選ばれたとのことで、その慧眼に心より敬意を表したい。基調講演1、特別講演2、教育講演12、パネルディスカッション6、市民公開講座3が組まれたほか、看護師部会でも基調講演1、特別講演1が生まれ、全ての講演が労働災害、勤労者医療に関連した課題を追求しており、夫々がメッセージ性を有しており拝聴したいものばかりであった。

大久保産業医大学長の基調講演「産業医と勤労者医療」では産業医と勤労者医療の接点は労働と云う言葉がキーワードであり、両者はともに労働者の生涯健康管理に務めることであると述べられ、産業医と労災病院医師の関係についても改めて考える機会を得た。また労災病院にはキャリア産業医の育成を支援して欲しいとの要望が述べられ、日頃善き産業医は同時に善き医師であってほしいと考えている小生には渡りに船のご意見で是非、産業医大の卒業生には労災病院で十分な研修をしてほしいと考えている。

次に印象に残った講演について触れてみたい。産業医大法医学の田中教授の特別講演「ご遺体が医療に語りかけること」には考えさせられる事が多かった。詳細は省略するが、入院時既に事故で意識がなく患者さん本人が疾病、治療について説明を受ける機会がないまま治療が続行され5カ月後、1年6カ月後に亡くなられた御二人のご遺体の例を提示され、長期間に渡り医師の苦痛緩和義務（安楽死）と生命維持義務（尊厳死）との闘ぎ合いに翻弄されたご遺体が無言の内に語りかけたものは何であったのかを問われた。日頃患者さんの気持ちの細部までは理解せずに生命維持を優先に治療している我々医師には考えさせられる意義深い講演であった。もう一題は慶応大生理学の岡野教授の特別講演「幹細胞システムを用いた中枢神経系の再生医学」で、実験的に作成した脊髄損傷マウスの亜急性期に受傷部に幹細胞を移植することで神経の再生に成功したとの神経科学の最先端の研究発表をお聞きし興奮を覚え心から敬意を表するとともに、脊損の慢性期患者の治療も夢ではないとの言葉に、現在闘病されておられる背損の患者さんにどんなに大きな生きる支えになるかと考えると、一日も早い研究の成功を祈らずにはいられなかった。この他、多くの素晴らしい講演を拝聴したが紙面の都合で残念ではあるが割愛させて頂く。

一日目の夕方の懇親会は労働福祉事業団の伊藤新理事長をはじめ産業医大の先生方、地元の方々も出席され看護師部会出席の方々も多く、和やかなうちに情報交換と懇親が図られ楽しく有意義な時を過ごさせて頂いたことに感謝したい。

一日目、二日目と看護師部会にも出席させていただいたが活発に討論がなされており今後の部会の発展を期待したい。

ここで幾つか気付いた事を述べたい。今回の50回大会には50回を記念するプログラムが見当たらなかったのも、次大会で本学会の今日までの軌跡が解かるようなパネルか記念講演または鼎談の様な企画が生まれれば現在の会員も興味をもって拝聴し認識を新たにするのはなからうか。本学会と日本産業衛生学会との合同学会または両学会会員による共通課題のシンポジウムの企画も以前より希望があると聞いており近いうちに実現をお願いしたい。プログラム編成についてであるが、基調講演の時は看護師部会もプログラムを組まず看護師も基調講演を拝聴できるようにさ

れたら如何であろうか。また、大会のプログラムに簡単な看護師部会のプログラムも掲載して頂けると有り難い。今後、会員の対象をコメディカルにまで広げるのであればそれらの方々の意見も取り入れてプログラムを組む必要があると思われるが如何であろうか。

平成16年度から労働福祉事業団が労働者健康福祉機構に替わるのに伴い労災病院も独立法人化の病院としてより一層政策医療を推し進めることになると思われる。労災患者が減少している現在、労災疾病のほか、勤労者のメンタルヘルス、脳・心臓疾患、女性勤労者の健康管理、災害医療などの分野で先端医学の研究がなされるのは勿論のこと、労働環境の変化、労働者の高齢化、経営と福祉・医療、企業と個人、対人関係などの社会的問題についても学会で取り上げていただき社会に於ける労災病院の役割を明確にし、地域社会に受け容れられる病院として労災病院の職員が同じベクトルに向かって力を発揮できることを期待している。